講　演　記　録

一人ひとりの子どもを主語にする学校を

講　師：荒瀬克己先生

開催日：令和７年６月６日（金）

みなさん、こんにちは。私が今から１時間ぐらい、前のスライドをご覧いただきながらお話をすることになっております。

まず、今日のためにご準備いただいた先生方や生徒諸君、それからまたご参加いただいた皆さん、お疲れさまでした。最後に私の話などを聞いていただくというのは本当に申し訳ないんですけれども、よろしくお願いいたします。

資料はお手元に配っていただいているかと思うんですけれども、その資料の多くはさっとご紹介する程度で終わることになると思います。今日一日を振り返って、私自身、ものすごく学びの多い１日を過ごさせていただきました。正直に申しまして、本当にびっくりいたしました。私自身は本当にいっぱい勉強させていただいて、ノートもいっぱい書いたし、うれしくて仕方がないので、それであえて、ちょっと変な、斜めからの発言といいますか、的外れなことも申すことになるかもしれませんが、その点ご容赦ください。よろしくお願いします。

さて、この「一人ひとりの子どもを主語にする学校」というタイトルは、中教審の「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の答申、いわゆる「令和３年答申」で使った表現です。さまざまな角度から、この「令和３年答申」につながっていく議論が行われていました。多くの会議があったのですが、そのうちの一つに高等学校教育のワーキンググループというのがありまして、その高校ワーキングの審議まとめで、「一人ひとりの生徒を主語にする高等学校教育を展開していくことが必要だ」ということを「はじめに」のところに書いて、それをそのまま「令和３年答申」にも適用して、「一人ひとりの子どもを主語にする学校教育」をめざすんだということを言ったのですが、この「一人ひとりの子どもを主語にする学校教育」というのは、ちょっと申し訳ないんですけど、何を言っているか分からないような言葉ですよね、はっきり言えば。

「抽象のはしご」という比喩があります。はしごを上れば上るほど抽象度が増して、下りれば下りるほど抽象度が低くなる。すなわち具体性が高くなっていく。私たちは、大き

な目標を共有しようとするときには、抽象のはしごを上ったところで話すことがあります。

先ほど申した的外れで失礼な申しようになるかもしれませんが、富山大学教育学部附属中学校の研究紀要にある「主体性の高まりを目指す課題学習」という研究主題も抽象度が高い言葉と言えるように思います。主体性をどう捉えるのか、それが高まるとはどんな変容が見られるのか、そのためにはどういう課題学習がいいのかといったような具体の話を考えていくと、つまり、はしごをどんどん下りていくと、「主体性の高まりを目指す課題学習」と言っていたときとは違って、「いや、それは違うんじゃないか」とか、「こういう考え方があるんじゃないか」とか、「こうしたらどうか」とか、さまざまな意見が出てくるように思います。

申しましたように、私もまた、今日拝見してちょっと変なことを言うというのは、抽象のはしごを下りたところで考えたくなって、ここはこれだけではない、ほかの方法があるのではないんですかみたいなことを言いたくなってしまうということです。つまり、それだけ、今日の附属中学校の取組が思考を活性化させる、さまざまな視座から考えてみたいと刺激する、そういう機会になったということだと思います。

この「一人ひとりの子どもを主語にする学校」という抽象度の高いものをどう具体に落としていくかという際に、「主体性の高まりを目指す課題学習」という研究主題は、はしごを下りるためのものになっているように思いました。頂いた資料にある「教科の本質に迫る授業づくり」という副題や、今日見せていただいた実際の授業、これらによって、はしごを下りたところの姿を見せてくださったと思っています。

ところで、「主体性の高まりをめざす課題学習」の「めざす」というのが平仮名で書かれているのはとてもすてきだと思います。文科省はこれを必ず漢字を使って、「目」と「指」を使って書きますが、私は非常にどきどきします。それで私も個人的には「めざす」は平仮名で書くので、こちらの平仮名で書かれているのは、とてもなじむというか、いいなと思っておりました。

話があちらこちらに飛んで申し訳ありませんが、これはこの学校の校訓です。いい字ですね。ホームページからコピーいたしました。この２つ目に、「己にうちかち　他を愛し」という文言があります。この組合せは珍しい気がします。己に打ちかつというのはよく使う言葉です。個人的な話で恐縮ですが、私の親が命名にあたって、己にかつようにということで克己と名付けたということですけれども、これはいわゆる名前負けというやつであ

ります。それはそれとしまして、己に打ちかつという言葉は、必ずしも他を愛するという言葉とセットで使われることにはならないと思うんですね。ところが、ここをあえて並べていらっしゃるところは、ちょっと変わっているなと思ったんですね。単独であるのと並立するのと、それぞれの意味がよりしっかりとしたものになるようにも思いますが、いかがでしょうか。

校歌についても申し上げたいと思います。今日の開会行事のときに私はそこに座っていたので、先生方のお話とか生徒さんの様子を拝見しながら、壁面の校歌を見ていました。この校歌、どうですか。この校歌の何とも言えないすごさというか。

「しろがねの山なみ　めぐりゆく青きながれ」、これは麗しい表現ですが、淡々と読めます。しかし、次ですね。「このごとく　亡びざるもの美し」、え、どういうことでしょう。山も、川も、この地ですから固有名詞が浮かびますけれども、「このごとく　亡びざるもの美し」。これを書いた大石修平先生は、富山大学の先生でいらっしゃったようでありますけれど、さきほどその話をいたしましたら教頭先生から大変な資料を頂戴いたしまして、この大石先生がお書きになった文章は、びっくりするような輝く言葉というか、その輝きがきらきらしたといったものではなくて、ずしんずしんと輝くというような、そんな表現はおかしいかもしれませんが、そのような言葉が連ねられていました。

大石先生は、亡びたものを目の当たりになさったんでしょうか。だから、亡びなかった山や川が、その亡びなかったものが美しいとおっしゃるのでしょうか。「ここにこそ　移りつつ　変わらざるまことあれ」。どうでしょう。ちょっと参りました。「移りつつ、変わらずにあることが、ここにある」とおっしゃるんでしょう。中学生はどういうふうにこの校歌を歌うんでしょうか。いやあ、実にびっくりしました。

２番というか第２連もとてもすごいですけど、この１連にものすごい意味合いというか、大石先生の思いなどと私が軽々しく言っては駄目だと思うんですけど、とても重いお考えが込められているのではないかなと思います。

そして、子どもたちに向けて、最後には「ひるみなく　若きわれら　学びゆく」と。「ひるみなく」という言葉もまた、極めて深いものではないかなと思っています。

「空かぎる　強き形」というのは、山が空を限っているということなのでしょうか。かつて北アフリカに住んでいた人たちは、ヨーロッパの限られた空に憧れたということが時々向こうの人の文章に出てきて、そういうことを見ていると、ヨーロッパの限られた空ではない、ここで言うところの空限るというのはどんな意味なのかなというのも、また思

った次第であります。

とにかく校歌に圧倒されて、それからまた今日の１日にも圧倒されて、予定していた話に入れなくなっていまして、申し訳ありません。

少し用意してきたことをお話ししたいと思います。

自己紹介をしますので、何もご紹介いただかないようにとお願いしまして、それで現職だけをご紹介いただきました。私は高等学校の教師を長らくやっておりまして、このスライドを見ていただくと「堀川」という名前がやたら出てきまして、富山にも堀川小学校ってありますけれども、私がおりましたのは京都の堀川高校というところであります。二条城の堀の近くにあるということで、そこから流れる川を堀川と呼んでおりまして、学校の前を流れる水路にちなんで名称にしたということであります。

私は25年間、この堀川高校というところにおりました。高校の教師をやっていたと申しましたが、在職した学校は２校しかなくて、もう一つは、最初に赴任した伏見工業高等学校というところです。

ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ラグビーが強かった学校で、今はもうこの学校は統合されてないんですけれども、「スクール・ウォーズ」というテレビドラマとか映画とかにもなりました。ちょうどそのドラマが対象としていた時期からすると、私が赴任したのは少し遅れていたんですけれども、最初はただただびっくりいたしました。

私はそもそも何となく教師になった人間で、申し訳ないんですけど、教育に対する情熱があったので教師になったというわけではありません。昔はそれこそ「でもしか教師」という言い方がありましたけれども、私なんかはその典型で、学生結婚をしていた関係で、とにかく食っていくのに一番手っ取り早い方法は何だろうというのを考えたら、教師でもやるかみたいな感じでなったという、本当に駄目な教師なんですけれども、それが伏見工業高校に行ってびっくりいたしました。生徒が、授業が始まっても教室にいない。いないどころか、入ってきても授業を聞いてくれない。とにかくそれまでの自分の学校のイメージがことごとく崩されました。

何となく教師になったような人間ですから、すぐに嫌だなと思いました。一緒に10数人が新規採用で入って、一番早い人は３日ほどで辞めました。当時、異動については教員の希望をすごく大事にしていました。現職の先生たちは、大変な学校には行きたくないので、異動希望を出さないんですね。そのため、何も知らない、文句の言えない新規採用が、毎

年そこに赴任するというか、放り込まれるというか、そんなことでした。それを後から知りました。

とにかく大変だったです。経験のない若手が集まって、それでみんな文句ばっかり言っていたんですが、文句も言うのは大事だなと思ったのは、ずっと毎日言い続けていると、こんなことをしていても何にもならないということに気がつくんですね。この気づきは大事でした。どうしたらいいんだろうということになって、やっぱり授業をやって自分自身が楽しいと思えるような、そういう毎日でないと駄目なんじゃないかということに思いが至りました。

そうこうしていると、3年ぐらい先輩なんですけれども、マツクラさんというんですが、マツクラさんはどうも数学の授業をやっているらしいぞというので、見せてもらいに行ったら、本当に数学の授業をやっているんですよ。生徒と楽しそうにやり取りしながらやっていて、それを見て私たちはびっくりして、何でなんだろうと考えたら、当たり前のことなんですけど、私たちに欠けていてマツクラさんにあったのは何かというと、生徒への敬意です。我々は、勉強もしない、こんなことも知らない生徒だというような意識を持っていたのですね。それで文句ばっかり言い合っていました。幸い、こんなことをしていても何にもならないと気がついたのでよかったんですけれども、気がつかないとずっと文句ばかり言って、結果的に何の解決にもならないということになっていたと思います。

マツクラさんの授業を見せてもらって、そうか、学校、教室の中というのは信頼関係が大事なんだと、お互いに敬意を持って接することがどれほど大事なのかというのを知って、そこから、そうか、教えるということは、こっちが勉強しなければ駄目なんだと思って、あんまり大したことではありませんでしたが、仲間うちで勉強するようになりました。

私は国語の教師だったんですが、係り結び、まさにさっきの校歌では、「ここにこそ　移りつつ　変わらざるまことあれ」とありますが、「こそ」があれば文末は已然形で結ぶとか、こういう卒業してしまうと忘れてしまってもあんまり困らないようなことを一生懸命教えるのが私の仕事だと思っていたので、その教え方とかを勉強しました。

そんなことでエッチラオッチラやっていくうちに、生徒が「できた」とか「分かった」とかと言って、「『ぞ』があるからここが連体形になっている」とかと声に出して喜ぶんですよ。分かると笑顔になるのだというのを初めて知りました。

それでいい気になって、調子よくやっていたら、3年ぐらい経ったある日、その分かって笑顔になっている生徒に、「先生、俺、これ一生懸命やってるやんか、これなんぼになる

ん？」って聞かれました。私は最初、その生徒の質問の意味が分かりませんでした。やりとりしていくうちに、係り結びを覚えて分かるようになったら幾らになるかと聞いていることを理解しました。さっきも言ったように、係り結びを覚えたって幾らにもならない。当たり前ですが、一切、金銭的な何らかの利益は発生しません。

ところが、この子たちがやっている工業の専門科目、たまたま質問した生徒は土木科という専門学科の生徒でしたけれども、彼らがやっている測量とか製図とか構造計算とか材料とか、こういう勉強は一定の資格を取るために必要で、その資格を取ると就職が有利になります。さらには、就職後、資格を持っていたら手当がつきます。全部お金に換算されるんです。だから、彼がこれは幾らになるのかって質問するのは、彼にとってはとても自然なことで、当たり前の普通の質問だったのです。

みなさんならどう返されるのでしょうか。私は何も答えることができず、「勉強やってて面白いか」って聞いたら「面白い」と言うので、「よかったな」と言って逃げました。

そこからずっと考えるようになったのが、学校で学ぶことは何の役に立つんだろうかということでした。これについて自分なりに何らかの答えというんでしょうか、何かを持ちたいというのを、その生徒の質問から気づかされたということです。ずっとこのことを考えてきて、いまも考え続けています。

もしも今、「なんぼになるん？」って聞かれたら、もうちょっとましな答えができるかもしれませんが、さてどうでしょうか。少なくとも、そういう問いかけをしてくる人とは、きちんと話し合いたいというのは思っています。

長い自己紹介で失礼しました。

さて、話を附属中学校に戻させていただくと、山根校長先生がお書きになった研究紀要の冒頭の部分に、「主体性の高まりをめざす課題学習」という言葉が出てきています。そのためには、「教科の本質に迫る授業づくり」が必要だということでありました。

私は、さっき申しましたように、学校って子どもたちにとって何を学べる場所なんだろうかと思うので、この教科の本質というのは一体どういうことなのかということを思いながら、つまりそういう問いを立てて、この文章を読ませていただきました。そして、読んでいく中で、附属中のこれまでの５年間の試みが、生徒が深い学びに達するための鍵となる見方・考え方とは何かとか、あるいは教科固有の見方・考え方を働かせるために、どのような問いを設定すればよいのか、また、深い学びの実現とはいかなる状態なのかといっ

たことをお考えになりながら進めていらっしゃるということがよく分かりました。

その具体の在り方が、当たり前ですが、今日の授業だったのだと思います。このように考えているんだということを発信していただいたのだと思います。それで私としましては、授業を見せていただく中で、考えたこと、疑問も含めて考えたことを、このあと申し上げたいと思います。

ところで、附属中の、見方・考え方を働かせ、深い学びを実現する授業づくりについては、深い学びとはとか、あるいは見方とは、考え方とはとか、これらについては、授業づくりの中で、教科として取り組んでいらっしゃるということです。何でそんなことをわざわざ強調するのかというと、研究主題や副題は学校全体のものであるのですが、それを教科として考えて、掘り下げて取り組んでいらっしゃるという印象が強かったからです。教科の特性に応じて取り組んでいらっしゃると言い換えるほうがよいかもしれません。ですから、教科によって生徒の活動の在り方が異なるように感じました。

ちょっと今日のことを振り返りたいと思います。

まず全体会で、「ご説明は割愛します」とおっしゃって、その意図は、むしろ生徒と話をしてほしいということで、私がおりましたグループには、最初にM君という子が来て、次にKさんという子が来てくれました。「君」と「さん」と分けているというのも妙かもしれません。また、こういうことは将来はなくなるのかもしれないなと思いながら、今はこれでお話しします。

２人とも、特にM君はトップバッターで来ていますから、とても緊張していて、その緊張が伝わってきて、何かうれしくなりました。こんな純粋な中学生と話をさせていただける機会があるのかと思って、本当にうれしかったです。

深い学びと広い学びということについて、M君と話しました。一緒にいてくださった先生が、「深い学びをしようと思うと、直線的に掘っていくだけではできないんじゃないでしょうか。回り道かもしれないけど、いろんなことをやっていく中で気のつくこともあるし、大事なことに出会うこともあるから。そういう意味で、深い学びのためには広い学びも要るんじゃないの？」と話されて、それを聞いた水野君が「うーん」と考えるところがとてもよかったですね。私の印象では、中学生だからといって、その先生は手加減をなさっていなかったんです。だから、思っていることをそのままおっしゃった。もちろん丁寧におっしゃった。それをちゃんと水野君は受け止めて、「うーん」と考えました。これは大事なことです。

この後、個別のグループの話が終わって、全体会になりました。そこで、深い学びと広い学びとを混同してはいけないというお話がありました。ともかく誰かと話をしたら広い学びをやって、それが深い学びなんだ、というような誤解をしては駄目だということで、「あえて深い学びという言葉を使っています」というご説明がありました。深い学びと広い学びの関係について、さっき私たちと話してくれたM君はどう思って聞いていたのだろうかと思いました。

それはそれとして、中学生のみなさんと先生方が、学びの在り方について話し合えるというのはとても大事なことです。先生方からすれば、授業をしないといけない、時間がなかなかない、といった思いとか現状とかがあるんですけど、中学生自身が、自分たちの学びについて、どんな学びが大事なんだろうということについて、考え、話し合う機会を持てるということは非常に大事だと思いました。

話が前後しますが、当事者が議論に参加することの大切さは、午後の社会科の授業で、まさに部活動の地域移行についての話合いがありましたので、いっそう強く思いました。中学生の話なのに、中学生を議論の外に置いておいて、勝手に大人たちが地域移行するべきだとか、それはおかしいとかとやっているのがよっぽどおかしい話なので、中学生が議論に入っているというのはとてもすばらしかったです。どんな学びをしていくのか、その学びが一体何になるのか、要は、これをやっていて「なんぼになるのか」というのを、中学生も参加する中で考えていくということは本当に大事なことです。

全体会に戻します。私はこういう会の持ち方、要は、冒頭に生徒との話し合いの時間が用意されているというのは全く初めての経験で、非常に刺激的で楽しかったです。あえてお願いするなら、生徒と個別に話をする時間をもっと長く取っていただけるとうれしかったなということを思っています。全体での話になると、何かまとめないといけないようなことになりがちですが、個別具体的にする話は必ずしもまとめなくてもよいし、ナマの感覚があって楽しいと思います。

勝手な注文を申しましたが、何でわざわざこのような形態でやろうとお考えになったのかなということが、一つ、私の中では疑問でした。妙な言い方をすると、附属としては研究発表会をやらなければいけないのでしょうけれど、ある意味面倒な形じゃないですか。ですから、初めの部分ももっと形式的に済ませることもできると思うのです。それをあたかも面倒に面倒を掛け算するみたいなこと、本当は避けたいところを、何でそういうことをやられるのかなと思ったのですが、今日実際に伺って、指導案と研究紀要等を見せてい

ただいたときに、ああ、こういうことをされる学校なんだというので、ちょっと驚いたんですね。

何かと申しますと、おととしまで研究紀要は冊子にして配っていらっしゃったということなんですけれども、今は参加者それぞれがダウンロードして持ってきてくださいみたいな感じにしていますということでしたが、私には冊子の形で用意をしてくださって、その用意されたのはプリントアウトしたものをホチキス止めしたものなんですけれども、ホチキス止めしただけではなくて、背表紙のところにテープがつけてあって、要は閉じたほうがガサガサにならないように、さらにはホチキス――ホチキスって商品名だから、ステープラーと言うのが正しいんですか。それはさておき――その針で指をけがしたりすることがあるじゃないですか。そういうことにならないようにテープが巻いてあるんです。何を言いたいかというと、面倒に面倒を掛け算するみたいなことを、そういうところでもなさるんだと思ったということです。

どなたかがアイデアを出して、そうだね、そうしようかみたいな、そんなふうにこの学校では決めていらっしゃる。資料の綴じ方一つとっても、おそらくあれこれとお考えになってお作りになっている。率直な感想としてそう思いました。ですから、生徒と話す時間を冒頭に持ってくるみたいなこともやってくださったのかなと思いました。

学校をつくっていくのは本当に厄介で面倒なことですけれども、学校づくりをしっかり全体の流れの在り方、ストーリーとして考えておられるのではないかと思った次第です。

最初、音楽の授業を見せていただきました。音楽室はとてもすてきな教室ですね。両側が窓になっていて、明るいときは光がいっぱい入って明るいんでしょうね。今日も結構明るかったですけど。でも、冬の富山は、暗いときにはものすごく暗いんでしょうね。そのものすごい暗いとかものすごい明るいとかといったことを感じながら、そこで音楽を学ぶ生徒たちはどんな気持ちなのかなと思いました。

今日は「翼をください」という歌唱の授業でありました。「オブリガート」と書いてあって、オブリガートってありがとうだよなと思っていたら、これはありがとうのポルトガル語でもあるけれども、メロディーと同時に演奏される、メロディーを引き立たせるために重要な役割を果たす別のメロディーパートだということで、それがどんな効果をもたらしているのかというのを、先生が生徒に聞いていらっしゃった。

生徒は、前列に女子が座って、後列に男子が座って、弧を描くように座っていて、まさ

に合唱のスタイルになっているんだと思いますが、本当にきれいに座っていて、そこに先生が質問をなさって、それに対して生徒たちが答えていく。ある生徒がオブリガートの効果として引き立てる感じがあると言ったら、いいなと思ったのは、それだけで止まってしまわなくて、これがＴ君だったと思うんですけれども、引き立てるための役割だとしたら、別にこれじゃなくて、ほかのものでもいいんじゃないかと異を唱える子がいるんですね。面白いな、どうなるのかなと思いました。ちょっとやり取りがあって、そうしたら先生が、「じゃあ、これがあるとないとでどう違うのか、みんなの歌を聞いてみましょう、Ｔ君、前においで」とおっしゃって、Ｔ君が前に出て、みんなのほうを向いて聞き役になったんですね。Ｔ君は非常にいい笑顔の生徒さんで、にこにこしながら、とってもうれしそう。あれで生徒たちも、「よし、Ｔ君にしっかりと聞かせてやるぞ」という思いが出たかもしれないなと思うぐらい、とってもいい笑顔を見せて、Ｔ君は聞いたんです。

オブリガートありなしの合唱のあと、「Ｔ君、どうだった？」と聞かれたときに、Ｔ君はめちゃくちゃ面白いことを言いました。「鳥のように白い翼つけてください」というこの歌詞が引き立つように思うと。正確なメモではないので、一語一句このとおりだったかどうかは別として、ただ、彼は「歌詞」という言葉を使った。この「歌詞」が引き立つと言ったんです。これは難しい話ですね。この歌詞が引き立つという言葉を、音楽の授業の中でどう受け止めて共有をするか、あるいはさらに考えを深めていくか。深い学びにいざなうのはとても難しいなと思いました。

私が、別に国語の教師だったからというわけじゃないんですけど、例えばこの校歌を見ても、ものすごく気になってしまう。Ｔ君がどういう子か知りませんけれども、ひょっとしたらＴ君も、歌詞、言葉に対する思いが強い子なのかもしれない。この子が、音楽の授業なんだけど、メロディーではなくて言葉を引き立たせる力がオブリガートの効果としてあるんじゃないかと言ったとしたら、どうしていくのか、先生は本当に大変なんじゃないかと思ったんですが、どうされるかを見る前に音楽室を出たので、これはぜひともまたお聞きできれば伺いたいと思った次第です。

ただ、このＴ君に聞いてもらおうということをやってくださったおかげで、私は音楽室でこの２年の生徒たちの本当にすばらしいコーラスを聞くことができて、位置としては後方で聞いていましたけれども、あの迫力に本当に圧倒されておりました。

その後、英語の授業に行きました。「友成晋也」は「ともなりしんや」さんとお読みする

のでしょうか。この方は慶応の野球部だったみたいですが、実は私、慶応の野球部のＯＢ会の副会長を存じ上げていまして、ただ見た目は全然野球部っぽくなくて、その人が同窓会の副会長なんだそうですけど、それはそれとしまして、この「ともなりしんや」さんがアフリカで甲子園プロジェクトというのを始めていらっしゃるということです。私は本当にいいかげんな理解をして、大谷翔平の言葉と誤解して、その後、「“Baseball is fairness”ということを大谷翔平が言ったみたいです」と校長先生に言ってしまったんですが、校長先生、間違っていました、すみません。これはアフリカで、このプロジェクトに参加している１人の少年の言葉であるということを、後から知りました。

この言葉の意味するものについて先生は生徒に問いを出されました。問われた生徒は答えられなかった。少なくともすぐには答えられなかった。すぐに答えられない理由は、単純に言うと２つあるように思います。

１つは、いろいろ考えないといけない言葉だろうと考えたから。これは重い言葉だろうから、いろいろ考えなければならないということで、すぐに答えられないという考えは、もっともだと思います。

もう一つは、この聞かれた生徒の英語の力。いろいろ思っても、英語で答えられるかどうかというのはちょっと分からない。

それで考えました。例えばこんなことはどうでしょうか。１人の生徒に質問をされたんだけれども、それを何人かで話し合うことにして、英語で表現するとしたらどう言えばいいんだろうかまで話し合わせて発表させる。これは当然お考えになると思うんですけど、それをなさらなかったので、なぜなんだろうかというのをこのとき思ったんです。実はこれは後から気がつくことがありましたので、それはまた後から申します。

母語以外で考えるというのは大変です。私も高等学校にいたときに生徒の探究を軸にした学校について考え始めて、その取組の一つとして、生徒たちに深く物を考える経験を積ませたいと思って、ディベートを入れたのです。そのディベートを英語でやろうという話も出てきて、どんどんハードルが上がっていく。こういうときは熱病にうなされたかのようにどんどんハードルを上げていく傾向があって、それで結果はどうだったかというと、はっきり言って失敗でした。ディベートもそうだったのですが、英語での発表をした後、質問を受ける、やり取りをするという場もつくったんですけれども、質問を英語ですることができる人はいたとしても、英語で答えることが極めて難しい。ちゃんと叙述しよう、説明しようとすると非常に大変で、さんざんどうする、ああするということを考えた上で、

英語でやるのをやめました。日本語でやって、いずれ英語でできるようになったらいいと考えることにしました。その「いずれ」がいつなのかというのはなかなか難しいところなのですが。

これは一つの判断です。だから、今日の授業もそういうご判断があってのことなのだろうから、どういうご判断だったのかというのも、ぜひ私としてはお尋ねしたかったなと思っています。その場でちゃんと言えなくて、すみません。また、研究会にも出ていないので申し訳ないんですけれども、ちょっとそんなことを考えておりました。

３つ目は、数学の授業を見せていただきました。平面図形。コンパスを使って円を描く。説明が難しいですね。作図の際の生徒の疑問で、そこに書いてあるように、２分の１とか３分の１の長さを測り取るにはどうしたらいいかという疑問が出ていることを先生が事前につかんでいらっしゃって、それについてどうしたらいいのかということを生徒に質問なさって、質問された生徒が前に出て発表していました。

いかがでしょうか。この３つの授業では、少なくとも私の見ている間は、一人の生徒が先生とのやりとりの対象としてクローズアップされています。

最初の音楽の授業では、盛んにＴ君と言いましたけれども、Ｔ君の疑問があって、Ｔ君がいろいろとやってくれて、それもとても面白かったんですけど、次の英語の授業も、問われた子がうまく答えられない姿を見て、私はほかに方法はないのかということをちょっと考えましたた。数学の授業も同じように、一人の生徒に対して先生が問いかけられておられる。生徒たちが話し合って考えるというのもあるんじゃないかなと思ったんですけど、そういう展開は、少なくとも私が見ている時間の中ではなかった。

その後、技術、これが午前中拝見した最後の授業でありました。技術の授業を見せていただいて、校内を利用する者が安心して用件を済ませられるようにするためには、どのようなアプリがあると便利だろうかという問いがあって、これについて子どもたちが考えるという授業でした。

この問いは、マグネットでホワイトボードに貼ることができるように準備されていた問いだったので、その場で出た問いではないと思います。あらかじめ先生が用意していらっしゃったんだと思うんです。

この授業を見て、ようやく私は気がついたんです。あ、そうか、１つの大事なテーマと

して、どういう問いかけをするのかということをずっと研究していらっしゃった。そういう流れの中での授業を見せてもらっていた。ところが私としては、何で生徒どうしの話し合いがないんだろうかというところにばかり目が行っていて、基本的にこちらでやっていらっしゃる、具体的にどういう問いかけをすることが教科の本質につながっていくんだろうかというところには、思いが及んでいなかったことに気づきました。大変失礼しました。

そこで申し上げると、こういう取組を５年間やってこられて、それがどうであったのかということについてお考えになったから、また次の新しい研究副題を設定されるということになっているんだと思うんですけれども、流れを十分理解していない者がここでまた申し上げるのは無礼であることを承知の上で、今までのやり方では何ができたのかということと同時に、何ができなかったのかということも、ぜひ明らかにしていただくことが大事なのではないかなということを、偉そうですが、思ったということです。

富山市教育長の宮口先生が来られて、私が午前中そのように思ったけれど、午後を見て、ちょっと考えが変わったという話を申し上げたら、別のご指摘を受けまして、またあらためてびっくりしました。宮口先生は、「午前は１年生が多いですよね、午後は３年生とか２年生ですよね」とおっしゃって、なるほどと思いました。

私は今、偉そうに、何ができたのか、何ができなかったのかというのをよく考えていただく必要がありますと言いましたけれども、３年生はやっぱり違うって、社会科の授業を見て思ったんです。ですから、そういう意味では、できたことがいっぱいあるということなのでしょう。その中で、あえてできなかったことは何だったんだろうかと考えていただいて、次の研究副題である自立した学習者をどうしたら育成できるかというところにつないでいただくとすばらしいんじゃないかなと思っているということですが、はたしてそのことに意味があるのか、ないのか。自分でも分からなくなってきました。

午後、理科の授業を見せていただきました。ダニエル電池はどのようにして電流を流しているのだろうか、という中心課題の周りに小課題が４つあって、２段黒板にはこのスライドにあるように、小課題１「電流はどの向きに？」、小課題２「電極ではどのような反応が？」、小課題３「素焼き容器はどのような役割を？」、小課題４「なぜ銅板がプラス極で亜鉛板がマイナス極か？」と書いてありました。

各班の取組が発表され、考えながら発表する生徒、それを助ける生徒がいました。これ

がとてもよかったです。各班がいろいろと取り組んでいるんですね。あれは班であれこれ話し合って、やりたいことをやっているんでしょうか。自分たちの取組とそこで得たことを発表するんですが、今申し上げたように、私がすばらしいと思ったのは、最初に発表した男の子が途中で止まって、話し切ることができなかった。その子が困っていたら、同じ班の女の子が助けに出て来てくれたんです。

滑らかに話すことをけなす気はありませんが、滑らかさを大事にし過ぎると、すらすら滑らかに話はできるようになるんだけれども、その滑らかな話というのは、ややもすると中身がどうであるかさえもカバーするというか、わからなくしてしまうというか、見かけ倒しになってしまって、そうなると、とっても残念だなと思っています。

まず一人の生徒が発表して途中で止まってしまった。それは、だんだん自分の中で混乱が生じて。あれは話がややこしいですよね、どっちがどっちかって。そういう中で混乱が生じて、その混乱のために話せなくなってしまった。そこに別の生徒が助けに来て、それを先生が、これはこうなんだよと説明はなさらずに、生徒の混乱をそのまま受けて、こういったことがあるよねと受けとめられた。生徒からはいろんな言葉が出ていましたよね。推論であるとか、仮説であるとか、そういういろいろと生徒が名づけているものがあって、実際に実験したグループもあれば、そうでなくて考えているだけのグループもあって――考えているだけと言っても、考えるのも一生懸命考えているから、それはそれですばらしいんですが――そういったことをこれから、下に書いていますけれど、先生がおっしゃったのは、結果の共有、考えたことや疑問の共有ということと、他の班との交流、「昨日もやりましたが、今日もやってね」とおっしゃったのですが、こういうのは、やっぱり理科という教科の特徴なのかなと思いながら、実にさまざまな問いかけがあるのだと、あらためて思いながら拝見していました。

そして次に、国語の授業に行きました。集会室で座り込んで生徒たちが話していました。授業の流れを理解しないまま拝見したのですが、文字や音声の言語表現に加え、映像等の非言語の表現メディアのうち、複数のものの相関によって組み立てられたテクストを「マルチモーダル・テクスト」と呼ぶそうです。どうやらそれを国語の授業に取り込んで取り組んでいるようでした。質問したいことのある生徒がほかの生徒のところに行って話し合うのですが、相手がどんなことを考えているかをあらかじめ知った上で動いているらしくて、この授業も面白かったです。

さっきも申しましたように、生徒に質問をするということを重視してやっていらっしゃるんだということには気がついていたんですが、午後のほうは質問をすることよりも、生徒の活動を中心に授業を組み立てていらっしゃるような気がしたので、その点についてお尋ねしたら、次の研究副題である、学びの往来を通して自立した学習者を育成する、というところを意識していますと教えていただきました。これは教科によってそういうことを考えてやってきていますという話を聞いて、どれだけ私が正確に承ったか分からないんですけれども、教科の中での議論と共有ということが、校内で重視され、相当しっかりと重ねてきていらっしゃるということを思いました。

それで、午前中の授業についても、教科の中でどういったことを中心にやっていくのかというのをしっかりと軸を立てて取り組んでいらっしゃることが分かりましたので、私のように横から見た人間からすると、単に生徒どうしの話合いはどうなっているのだろうというような感じで見てしまうんですけれども、そうではない、何を大事にしないといけないのか、やったことについて省察しながら、次にどうつなげていくのかというのを考えながらやっていらっしゃる。当たり前と言えば当たり前なんですけど、そこに気づかされたというのが、この時点での私の思いです。

英語の授業についてお話しした際に、授業の在り方について気づいたことがあると申し上げたのは、このことです。開会行事のことや研究紀要のことや、とても丁寧に考えて取り組んでおられるさまざまなことが繋がっているということが、やっと分かりました。

先ほども申した社会科の授業です。

部活動の地域移行について、このスライドにお示ししたようにＡ案、Ｂ案、Ｃ案という３案があって、これはみんながポケットにＡ案の人は赤、Ｂ案の人は青、Ｃ案の人は緑のカードを入れていて、一目瞭然でどの考えなのかというのが分かるようになっています。

「私はＢ案、平日のみ学校で、と思っていたんですが、今いろいろ話を聞く中でちょっと違ったことも考えるようになって」と生徒が発言したら、先生はそれを板書していかれるんですね。これも大変だと思うんですが、そのおかげで、どういう意見が出て、それがどう変化していっている意見なのかというのをみんなが共有できる。

これをパソコンとかタブレットとかの端末を使ってやるという方法もあると思うんですが、この授業は黒板を使うという形でやっていらっしゃいました。こういう教室を見ると、何かの条件が整っていなかったらできないということではないということを示してい

らっしゃるとも言えるわけです。本当にすごい。でも先生は大変だったと思います。

スライドの一番下に「さすが３年生　ということは……積み重ね」と書きましたが、書いたとおり、さすが３年生だと思いました。とてもきちんと、堂々としゃべるし、さらに言うと、廊下にまでしっかり聞こえるような大きな声で話していらっしゃるし、２年余りの学びがこれだけ生徒の成長に意味を持っているということをあらためて思いました。

やっぱり同じ３年生の体育の授業、バレーボールの授業を見せていただきました。

体育の先生にとっては普通なのかもしれませんが、バレーボールをポールの先っぽにつけて――これはもともとそういうものがあるんじゃなくて、ご自分で作られたんだと思うのですが――それを持ってコートの中を歩き回られる先生の姿は、見ていて頼もしく楽しくなりました。

ここで私はまた気がついたことがあって、それをご紹介したいのですが、本当に気づきを引き出していただくことの多い一日でした。

まさにこの場所ですけれども、その辺りに先生が立っていらっしゃって、ホワイトボードが置いてあって、向こう側から後ろ側のこっちを見る感じで生徒たちがグループごとに座っているんですが、そこで、カバーをどうするか、どんな動きをするとカバーになるんだろうといった、カバーの意義みたいなことをいろいろと気がついたことを発言するのですね。その際、１人の子が手を挙げました。その子は座っている場所で話をしました。

２人目、赤の８番のゼッケンをつけていた女子生徒が手を挙げて、そのときに先生が、私はそのとき聞きもらして、なぜそうおっしゃったのかわからなかったのですが、前に来て説明するようおっしゃったんですね。

これがとても面白かった。１つの授業の中で異なることが起こりました。生徒たちは、教室の中と同じように前を向いて着席しています。そして、片や教室型の生徒の席から先生のほうに向かって発言する生徒、もう一方で、前に出て来てホワイトボードを使ってマグネットも動かしながら生徒たちに向けて発言する生徒。これが、ゼッケン８番の女の子です。

あの場におられた方はお気づきになったんじゃないでしょうか。何か景色が変化したみたいな感じ。空気が動いたのですね。色が変わったと言ってもよいかもしれません。ゼッケン８番が赤色だったということもあったのかもしれませんが、ほんとうにその場の色が変わったという気がいたしました。

生徒の席から話した子、もちろんほかの子はみんな聞いているんですけれども、そのときの受け止めと、ゼッケン８番の子が前で話したときの受け止めは、きっと違うだろうと私は強く思いました。

こういう２つの姿を見せていただいて、ここから、またあらためて思ったのは、やはり生徒が参加する形の授業というのは、そこにいる生徒たちにとっても、とても大きな意味があるんじゃないかということです。

もう一つ、先生にも驚きました。とても言葉が丁寧で、こんな丁寧に話をされるのかという驚きです。生徒たちは幸せですね。

今日は一日、よい時間を頂戴しました。私のほうは、いろいろ勘違いも含めて無礼なことを申し上げているかもしれません。失礼があったらお許しください。

学習指導要領の改訂について少し申し上げたいと思います。

議論の途中ですが、ざっと言ってしまうと、大きく変える必要はないだろうというのが大方の意見であるように思います。私もそう考えています。

その理由を二つ申し上げると、一つは現行の学習指導要領が、前文を含めてよく考えられたものであるということでしょう。変えることを考えるよりも、定着を図ることに力を注ぐことが重要だということです。

もう一つは、小学校学習指導要領が出た年度の最後、中学校はまだ始まっていない年、高校はもう一年たたないと始まらないという年に、中教審から「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の答申、いわゆる「令和３年答申」が出ました。私は、この答申は学習指導要領の取扱説明書であると思っています。

「令和３年答申」はいろんな意味でこれまでになかった答申です。議論の最中にコロナ禍に見舞われました。そのため中教審としては初めてオンラインの会議をしました。そういう状況の中で議論して、多様な一人ひとりの子どもをどのような学び手に育てていくかということですが、今ご覧の資料にあるように、「自立した学習者」ということです。

これは高等学校教育についての部分ですが、高等学校教育は、初等・中等教育の最後の３年ないしは４年を担う場ですから、小、中、高と進んできた最後にどういう姿であってほしいのかというと、「自立した学習者」。今日、中学３年生はさすがだなと思ったのと同じように、高校生はやっぱりさすがだ、という姿が見たいということです。

では、「自立」って何なのかということです。このスライドでお示ししているように、辞書には、「自立」とは誰にも頼らないとか援助を受けないとかといった意味がありますが、学校教育においての「自立」は、他者と協働できるということも含んだ意味の「自立」だと思います。学び合えるということは、支え合えるということだと思います。

そういう意味で考えると、「自立」に向けた取組をする際、「令和３年答申」は「個別最適な学びと協働的な学び」の重要性を説いていますが、「協働的な学び」も「個別最適な協働」があるはずではないかと思うのです。おそらく、附属中学校で新たな研究副題とされる「自立した学習者」についても、まさに「個別最適な協働」というものも含めてお考えになることが必要なのではないかと、僭越ながら、思いました。

このスライドの真ん中辺りに書いています「１対１の大切さと１対１の難しさ」ですが、

授業の中で、１対１で先生と生徒が向き合う。これはあらためて、本当に大事なことだと思いました。ただやはり、１対１は難しいとも思います。その両方について考えつつ、どういう指導を展開するか。答えがなかなか見えませんが、大切な課題だと思いました。

そういったことを教科の中で議論をなさって、具体的に実践していかれるということの重要性とともに、校内研修を通して学校全体の取組としていくことの重要性についても、あらためて思ったという次第です。

スライドの最後に書いたのは、１階の廊下の空きスペースに置かれていたベンチのことです。あのベンチは何に使っていらっしゃるんでしょうか。質問しそびれたのですが、あれはとてもいいですね。あそこで、生徒がふらっと来て、座って誰かとしゃべったりすることがあるのかもしれないし、先生と生徒、あるいは先生どうしの対話の場になるかもしれない。ひょっとしたら、ちょっと休憩する場所にもなるかもしれない。ともかく、あのベンチに心惹かれました。

すみません、私の勝手な感想をあれこれ聞いていただきました。

今日は、本当に勉強になりました。お呼びいただけてよかったと思っています。ありがとうございました。心から感謝申し上げます。

ご清聴どうもありがとうございました。（拍手）